偏光素子を用いた昼間観測用ライダーシステム開発にむけた大気散乱光の測定

Measurement of a sky light using a polarizer for a development of a lidar system for daytime observations.

Hidehiko Suzuki¹, and Akihiro Yamamoto²

¹College of science, Rikkyo university

² Faculty of engineering, Shinshu University

A lidar is a powerful tool for an atmospheric study between troposphere and thermosphere which can deduce an altitude profile of temperature, density, and optical properties of clouds. An SNR of signal is significantly disturbed by continuum emissions from a daylight (Rayleigh and Mie scattering of the sun and the moon lights) and artificial lights from a city. In particular, a sky light from the Sun is greater about 5 orders than night time continuum emission which significantly reduces a precision of the lidar observations during daytime. Fabry-Perot etalon, and Faraday filter are often used in a lidar receiver to reduce a background light. In addition, a polarizer is also useful to cut background light because sun light scattered by an atmospheric molecules are polarized. In particular, a sky light which satisfies scatter angle of 90 degrees is nearly in linear polarized. Therefore if a receiver telescope can track such direction with diurnal motion, a sun scattered light from the direction can be efficiently suppressed by the polarizer. However, it is necessary to control both a transmitter (a laser) and receiver if we try to apply this principle to a lidar observation. In this paper, the result of a quantitative observation of a sky light using a polarizer for a development of a new lidar system specialized for a daytime operation are presented.

対流圏から熱圏までに至る大気温度や雲の観測に威力を発揮するライダーは、地上から打ち上げたレ ーザー光の各種散乱体による後方散乱光を受信することで、散乱体およびその周辺における大気パラ メータ(温度、密度、消散など)の高度プロファイルを導出可能な優れた手法である。ライダー受信系に は、レーザーによる後方散乱信号の他に、太陽や月などが大気分子やエアロゾルによって散乱される 光や、街明かりなどの連続光成分が同時に測定されるが、これらのバックグラウンド光は、レーザー光か らの後方散乱光(信号)の SN 比を悪化させる要因となっている。特に、夜間にくらべて昼間における背 景光成分は5ケタ以上も強度が大きく、ライダーの昼間観測における障壁となっている。ライダー観測 で一般に用いられている背景光抑制の方法としては、ファブリペロエタロンやファラデーフィルターによ る狭帯域化、視野の狭小化などがある。その他、偏光素子も背景光除去に効果を発揮する。偏光素子 は、太陽光が大気によって散乱された光が偏光状態にあることを利用して、シグナルのもつ偏光面(= レーザーの偏光面)以外の光(=背景光)を除去するものである。 背景光は主に太陽からの散乱光で あり、太陽と観測者の見ている方角の関係にもよるが、ほとんどの場合、楕円偏光状態で望遠鏡に入射 する。したがって、直線偏光であるレーザー光だけを偏光素子により透過させることによって、それ以外 の成分(=背景光)を最低でも 1/2 程度まで落とすことができると期待される。 特に、 散乱角が 90 度付 近となる場合、観測者から背景光をみると背景光は直線偏光しているように見える。したがって、この偏 光面から90度ずらした偏光面内でレーザーを送信し、受信系の偏光素子により、レーザー成分だけを 受信すれば、背景光を大幅に抑制することができる。 この効果は、偏光面が太陽方位角と平行にある とき最大となる。したがって、この原理をライダー受信システムに応用する場合、送信レーザーと受信系 の発信および透過偏光面を、太陽方位に同期させて同時に制御させる必要がある。 本発表では、国 内における大気散乱光測定による、偏光プリズムによる大気散乱光強度の抑制率の定量的な評価結 果と、ライダー受信系への応用に向けた検討状況を報告する。